

## ペンシルヴァニアの‘カダフィ大佐’

世界中を敵に回して独裁国家と弾圧の恐怖を国民に押し付けてきたアラブの暴れん坊、リビアのカダフィ大佐も、今や伸るか反るかの正念場を迎えている。いよいよ年貢の納め時かと思いきや、民主化を求めてデモ行進する自国民に向け、見境なく発砲するハチャメチャぶりである。

1981年9月、文部省教員海外派遣団のお伴で社会主義国家・ルーマニアを訪れ、国内での研修を終え首都ブカレスト空港へ向かってバスを走らせていた時、幹線道路の手前で突然厳戒中の軍隊に通行停止を命ぜられた。当時の権力者・チャウシェスク大統領に会うために隠密裏にルーマニアを訪れたカダフィ大佐一行護衛のため、幹線道路が前触れもなく全面封鎖されてしまったのだ。独裁者の命令一下、国民の自由な権利が冒涇される理不尽と不条理である。

空港への道路はすべて閉鎖され途方に暮れた。愕然とするとともに、どうにかしてすぐにも空港へ辿る手立てを考えねばならなかった。ドライバーに脇道を尋ねても、天を仰いでただお手上げのポーズを取るだけだった。そのまま黙っているわけにはいかない。ふと田畑の遥か遠方を見ると狭い未舗装の農道を耕運機が走っているではないか。イチかバチかに賭けた。過分なチップをちらつかせドライバーを説得して凸凹道の農道へバスを乗り入れさせ、そのまま最悪の乗り心地に全員腰を浮かすような姿勢で何とか空港に到着し、間一髪でウィーンへ向けて飛び立つことが出来た。

あの苦渋を味わって以来、胸の内にはにつつきカダフィに対する怨念が増幅されていった。

そして2年後、アメリカはペンシルヴァニア州アルツーナ市を訪れた時、同市内の学校を訪問中につつきカダフィ大佐？にばったり出食わしたのである。予断もなくカダフィに「ルーマニアではえらい目に遭わせてもらいました」と話の中に茶々をいれると、「その節は失礼しました。チャウシェスクがこっそり来いというものですから」と受けてくれた。このジョークには、笑いが止まらなかった。

それにしても、教育委員会の指導主事を務めていたニセモノのカダフィ大佐は、あまりにも本物に似ているためご当地でも「カダフィ」と呼ばれていた。ただ、人間の格はニセモノが遥かに上だった。リビアのカダフィも国民の気持ちを考え、もう少しペンシルヴァニアのカダフィを見習いジョークを解してもらえれば、アラブ世界ももっと和やかになって受け入れられやすいと思うのだが……。

(近藤)